

被服学分野

第1節 被服学教育における学士力の考察

被服は、気候、風土、地理的条件に左右されながらもそれぞれの時代、社会のニーズにより変化し、創意工夫され今日に至っている。人間生活に最も身近な存在としての被服は、身体の保護、自己表現手段、コミュニケーション手段など多様な役割を通して、物質的な豊かさに加えて精神的な豊かさや生活の質の向上に貢献している。豊かな社会を築くために「ヒト・モノ・環境」などの関係性に配慮して、被服の様々な役割と在り方を科学的・体系的に探究することが被服学の目標である。

このような背景から被服学教育は、個からグローバルへと進展している現代社会における個人の価値観やニーズの変化を踏まえて、より良い生活に寄与できることを目指している。

そのためには、社会・産業・環境などの観点から衣生活を総合的に考え、実践できる能力を培い、持続可能な社会のイノベーションに取り組める力を養う必要がある。

そこで、被服学教育における学士力の到達目標として、以下の五点を考察した。

第一に被服の歴史・文化や被服の社会的、保健衛生的役割を理解し、被服の着用などによるイメージを思考することができること、第二に人体を把握し、人体と被服との関係や被服構造を知り、被服の構成力を身につけ被服パターン設計に活用できること、第三に被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができること、第四に繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できること、第五に被服の生産、流通、消費における環境問題などを理解し、未来に向けたより質の高い衣生活を提案できることとした。

【到達目標】

1 被服の歴史・文化や被服の社会的、保健衛生的役割を理解し、被服の着用などによるイメージを思考することができる。

ここでは、被服が持つ多様な役割を理解させるため、科学的、社会的、保健衛生的観点から総合的に考察する能力を身につけさせねばならない。そのためには、被服の歴史や文化的背景を理解させた上で、自己表現や他者との関係の調和、精神的なやすらぎなどを総合的に捉えられることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

服飾文化史、現代ファッションデザイン、ファッションイメージ表現、被服心理、基礎造形など

【到達度】

- ① 被服の歴史・文化・役割を理解し、被服の社会的、保健衛生的役割を論理的に説明できる。
- ② 被服の着用イメージや感性の表現ができる基礎能力を身につけている。

【測定方法】

- ①は、レポート、筆記試験などにより確認する。
- ②は、作品を通して感性や技術を確認する。

【到達目標】

2 人体を把握し、人体と被服との関係や被服構造を知り、被服の構成力を身につけ被服パターン設計に活用できる。

ここでは、快適な被服を設計するために、人体に適合する被服構成の知識と技術を身につけさせねばならない。そのためには、人体の構造・動作・生理機能や人体と被服との関係を理解させ、人体計測法、被服設計のための作図法や基本的な縫製技術の修得を目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

被服構成学、被服人間工学、被服衛生学、パターン設計、縫製など

【到達度】

- ① 被服構成の基礎を理解して、被服設計ができる。
- ② 人体の構造と機能を理解して、被服形態との関連を説明し、機能評価ができる。
- ③ 縫製の基礎的な知識と技術を身につけ、被服造形ができる。

【測定方法】

- ①は、筆記試験及び実技試験などにより確認する。
- ②は、レポート、筆記試験などにより確認する。
- ③は、筆記試験及び作品などにより確認する。

【到達目標】**3 被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができる。**

ここでは、被服材料の種類と外観・着心地・扱いやすさなどの物理化学的特性が、被服の造形性・衛生的機能及び管理保存方法に大きく影響することを理解させねばならない。そのためには、材料物性の基本的な実験法と解析評価法を修得させ、新しい被服材料の動向を踏まえて、材料特性を活かした設計・製作やファッションプレゼンテーションなどの着装表現ができることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

被服材料、テキスタイルデザイン、アパレル設計、色彩設計など

【到達度】

- ① 被服材料の特性を理解できる。
- ② 被服材料の特性を活かしたアパレルの設計ができる。
- ③ ファッションプレゼンテーションができる。

【測定方法】

- ①と②は、筆記試験、レポートなどにより確認する。
- ③は、作品制作やプレゼンテーションなどにより確認する。

【到達目標】**4 繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できる。**

ここでは、合理的で豊かな衣生活を生産者側と消費者側の視点で考えられるようにするため、アパレル産業における生産、流通、販売の仕組みや製作の意図を理解させねばならない。そのために、アパレル商品の企画過程を分析して、情報収集、コンセプト策定、デザイン化に取り組ませる。

【コア・カリキュラムのイメージ】

アパレル生産、アパレル企画、マーケティング、リテーリング、ビジュアルマーチャンダイジング、アパレル産業構造・流通など

【到達度】

- ① アパレル産業の構造と生産のプロセスを理解できる。
- ② マーケティング手法について理解し、市場調査・分析の方法を活用できる。
- ③ アパレル製品の情報収集、コンセプトの策定、デザインを考えることができる。

【測定方法】

- ①は、筆記試験などにより確認する。
- ②は、筆記試験、レポートなどにより確認する。

③は、レポートなどにより確認する。

【到達目標】

5

被服の生産、流通、消費における環境問題などを理解し、未来に向けたより質の高い衣生活を提案できる。

ここでは、将来の衣生活が環境に配慮した豊かなものとなるよう、自ら判断できるようにさせねばならない。アパレル産業においても生産、流通、消費のすべての面で環境に配慮した循環型システムへの移行を考える必要がある。そのためには、生分解性素材の開発、長期的な使用を見据えた資源の有効利用の検討、消費者による3R (Reduce, Reuse, Recycle) の実施などを十分に把握・理解させる必要がある。

【コア・カリキュラムのイメージ】

アパレル管理、アパレル環境科学、アパレル消費科学、ライフスタイルなど

【到達度】

- ① 環境や社会への影響などを考えて、被服の選択、維持管理の方法を理解できる。
- ② 省資源的ライフスタイルを意識した衣生活の向上を考え、行動することができる。

【測定方法】

- ①と②は、レポート、筆記試験などにより確認する。

第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル

被服学教育における教育改善モデル【1】

上記到達目標の内、「被服材料の特性を理解し、デザイン考案や被服設計への応用と具体的造形表現ができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 被服材料の特性を理解できる。
- ② 被服材料の特性を活かしたアパレルの設計ができる。
- ③ ファッションプレゼンテーションができる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

従来、被服の材料・デザイン・設計に関する授業は個別に行われることが多く、材料特性を活かしたデザインの決定、あるいはデザインに適した材料選択という被服製作のための相互的アプローチに対応できる能力を高める学修の場が提供されてこなかった。

ここで提案する授業は、関連科目間の連携による統合授業により、被服材料特性と被服のデザインや設計との関連性を理解させ、実践的に活用できる力を身につけさせることを目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、2年次までのカリキュラムで基礎的な被服材料・デザイン・設計の知識や技術を修得していることを前提とするが、能力が身につけていない場合はeラーニング*で補完できる仕組みを構築しておく。

関連科目間の連携による材料・デザイン・設計の流れを体現する実験・実習を行うために、教員同士が意識合わせをして協働する場を設けておく。実践力のある教員を中心に、被服デザイン、被

服材料、被服設計に関連する担当教員が共通理解のもとに協働授業を行う。到達度の確認は、学修成果の評価に加えて、外部評価により行う。

2.3 授業にICT*を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する（図1、図2）。

- ① 被服設計におけるデザインと被服材料の造形特性との関連を実際の商品や作品から考察させる。
- ② ネット、文献、市場調査などによって被服材料の種類を調査し、物理特性を考えさせる。
- ③ 衣服の種類とデザインに適した材料特性を考えさせる。
- ④ 制作課題を与える中で、造形特性や材料特性を自ら考え、製作、コーディネートさせる。
- ⑤ 作品を発表させる中で振り返りを行わせ、評価を受ける。
- ⑥ 学修過程を学修ポートフォリオ*に記録させるとともに、多元的な評価結果をデータベース化し、発展的な授業改善につなげる



図1 市場調査で集めた画像



ストレッチウール シーチング 別珍 ギャバジン ストレッチサテン
図2 同パターン同一ボディ異素材によるドレープ性サンプル

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する（図3、図4）。

- ① 被服設計はパターンのみならず布の特性が大きく関わることを理解させるために、布の特性を活かした作品や商品を動画や静止画で紹介し、使用されている布の材料特性をグループで調べさせる。
- ② 雑誌や店舗観察から集めた布の特徴を形容詞で表現し、その材料特性を考え、データベース化させる。
- ③ グループで衣服の種類ごとに用いられている布やその材料特性、使われ方をまとめさせ、学修支援システム*に掲載させる。
- ④ 材料特性を活かしたデザインを考案させ、適切な布を選択し、材料特性を測定した上で製作させる。
- ⑤ 各種衣服に用いられている布の種類と材料特性、地の目方向など、衣服の製作意図と被服材料との関係、製作意図が達成されたかどうかをグループで相互評価させる。
- ⑥ 特徴のある作品をネットに掲載し、他大学や企業などの多面的な外部評価をネット上で受けた結果を踏まえて、創発的な授業に結び付ける。



図3 素材特性を調べる



図4 ハートループ法で剛軟度測定

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① ネットを通じて世界中の衣服材料及びアパレル製品の情報を活用し、材料特性とデザインの関係を理解させることができる。
- ② ネット上のプラットフォーム*を通じて関連科目の教員同士の意識合わせと協働が可能になる。
- ③ 他大学や産業界とのコラボレーションによる外部評価を受けることで、学びの通用性を確認し、創作意欲を高めることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 関連科目の教員同士が協働するプラットフォームが必要になる。
- ② 他大学や産業界とのコラボレーションを行うクラウド環境が必要になる。
- ③ グループや協働での学修を支援するために、上級学年生によるファシリテーター*が必要になる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員が材料特性を活かしたデザインの決定、あるいはデザインに適した材料選択、衣服制作などの到達度の確認を行い、ポータルサイト*に公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。必要に応じて、教員、専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 大学がバナンスで関連科目の教員同士が協働する仕組みを構築することが必要である。
- ② 大学間や産業界との連携の仕組みを組織的に構築する必要がある。
- ③ 上級学年生や大学院生による学修支援を組織的に行う仕組みとして、学内雇用制度を整備する必要がある。
- ④ 学生の作品の著作権保護を大学としてシステム化する必要がある。

被服学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「繊維、アパレル産業における生産、流通の仕組みと企画設計までのプロセスを理解できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① アパレル産業の構造と生産のプロセスを理解できる。
- ② マーケティング手法について理解し、市場調査・分析の方法を活用できる。

- ③ アパレル製品の情報収集、コンセプトの策定、デザインを考えることができる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

現在のアパレル産業の構造と生産のプロセスを把握し、社会との関連の中でアパレル製品の在り方を考えるには、実際の社会でどのように商品化され、生産されているのかを知ることが重要である。しかし、現状では実際を見ることなく、知識の伝達に終始している。

ここで提案する授業は、産業界との情報交換と実体験を通じた産学連携の授業を展開し、実践的な商品企画能力の開発を目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、2年次までのカリキュラムで基礎的な被服材料・デザイン・設計・人体の生理や心理などの知識や技術を修得していることを前提とするが、能力が身につけていない場合はeラーニングで補完できる仕組みを構築しておく。産学連携を行うために、大学と産業界が共通理解を深め、目標達成のために役割分担を意識合わせし、協働する仕組みを作ることを前提とする。その際、教員同士が意識合わせをして協働する場を設けておく。

2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 産業現場のフィールドワークを実施することで、現場の生産プロセスを把握・理解させる(図1)。
- ② 産業データベースなどにより情報収集やマーケットリサーチを行い、コンセプトやデザインの傾向を理解させる。
- ③ テーマに沿ってデザイン考案させる。
- ④ ブランド制作に適切なものを選出して、グループで議論させ、コンセプトを明確にし、プロセスを共有化させる(図2)。



図1 産業現場のフィールドワーク



例 ターゲット：20代前半 かっこいいカジュアルなメンズ
 コンセプト：いろいろな顔を持つ人気タレントをイメージモデルとして、それぞれの表情にふさわしい、カッコイイスタイルの提案
 キーワード：おじかわ、さわやか、アウトドア、かっちりフォーマル

図2 コンセプト・ターゲットを共有化、ブランドデザイン提案

- ⑤ デザインの修正を繰り返し、ブランドコンセプトを確定し最終デザインを確認させる。
- ⑥ 制作の過程を整理するために学修ポートフォリオの形でファイリングし、企画書を制作させる(図3)。
- ⑦ 学修成果として作成したブランドデザインをプレゼンテーションし、各グループ間で相互評価を行うとともにネットを通じて学内外に公開し、産地・企業を含めた評価を受ける(図4)。



図3 デザインのファイリング、企画書制作



図4 ブランドデザインをプレゼンテーション

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 事前にネット上で産地や企業をリサーチさせ、フィールドワークすべき内容を絞り込ませる。
- ② 産地見学を行い、その結果をレポートさせ、学修支援システム上に掲載し、情報共有させる。
- ③ バーチャルカンパニーを設立させ、役割分担にしたがってブランドプランニングをさせる。
- ④ グループ間でプリテストを行い、産地・企業に向けてブランド提案させ、商品化を目指す。
- ⑤ 学修過程を学修ポートフォリオに記録させるとともに、評価結果をデータベース化し、発展的な授業改善につなげる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① バーチャルカンパニーをネット上に設立し、商品化を目指すことで学生のモチベーションの向上が図れる。
- ② 学びをプラットフォーム化することで、教員-学生-産地・企業との連携をリアルタイムで行える。
- ③ 学修成果をデータベース化することで授業改善を促すとともに、社会と呼応した企画に活かすことができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 関連科目の教員同士が協働するプラットフォームが必要になる。
- ② 他大学や産地・企業とのコラボレーションを行うクラウド環境が必要になる。
- ③ 学修過程や学修成果をデータベース化し、管理・共有できる仕組みが必要になる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員がアパレル産業の構造と生産プロセス、マーケティング手法、アパレル製品の企画などの到達度の確認を行い、ポータルサイトに公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。さらに、産業界の専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 大学がバナンスで関連科目の教員同士が協働する仕組みを構築することが必要である。
- ② 大学間や産業界との連携の仕組みを組織的に構築する必要がある。
- ③ 学生の作品の著作権保護を大学としてシステム化する必要がある。

第3節 改善モデルに必要な教育力、FD※活動と課題

【1】被服学教員に期待される専門性

- ① 生活を豊かにする衣生活の重要性を伝える責任感と使命感を有していること。
- ② 我が国及び世界の現状について、総合的に考えられること。
- ③ 被服の課題を通じて科学的な根拠に基づいてイノベーションできること。
- ④ 教員間、産業社会との連携をコーディネートできること。
- ⑤ ICTなどの教育技法を駆使して、実践的な教育指導ができること。

【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 授業のカリキュラム上の位置付けを教員間で共有し、シラバス※の調整を行い、カリキュラムポリシーに沿った授業を実施できること。
- ② グループワークを通じて体現的な実験・実習を展開できること。
- ③ 被服デザイン、被服材料、被服設計の専門教員と協働する中で、人体と被服との関連付けを実践的に考えさせられること。
- ④ 産業界との情報交換と実体験を通じた産学連携の授業を展開することができる。
- ⑤ 学修過程を学修ポートフォリオ化し、成果をネットを通じて学内外にプレゼンテーションさせられること。
- ⑥ 学内外の評価結果をデータベース化して振り返りを行わせ、改善させられること。

【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

(1) FD活動

- ① カリキュラムの全体像と当該授業の位置付け及び授業内容と教育方針との点検・評価の確認を組織的かつ継続的に行う必要がある。
- ② 関連分野の研究報告会及び授業参観などに積極的に参加する機会を設け、教員間の連携を強化する場を継続的に設定する必要がある。
- ③ グループや協働での学修を促進する指導法のワークショップを組織的に行う必要がある。
- ④ 産地・企業の研究報告会に積極的に参加し、専門科目を担当する教員と企業関係者との連携を図り、社会の状況を授業に活かす必要がある。
- ⑤ 学内外の評価による振り返りを行わせる指導法について、専門家を招くなどの研究会を実施する必要がある。

(2) 大学としての課題

- ① 授業の録画、教材コンテンツ、ネット上のディスカッションを可能にするため、学内外の多様なコンテンツをアーカイブする必要がある。
- ② 学修ポートフォリオを活用した学修支援を実効あるものとするために、大学として組織的な取り組みと支援が必要である。
- ③ 学内外の関連分野の教員や社会の専門家などから協力を得るために、連携の呼びかけ、制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ ICTを活用した教育方法を支援する組織と環境を大学として整備する必要がある。
- ⑤ 学務系職員、ICT技術系職員の教育支援能力の開発と教員との連携の強化への支援が必要である。
- ⑥ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。